

佛夷母也

妹三人執

比丘尼品第四

戒弟子中久出家學國王敬事一形謂大衆道比

丘尼是也大衆道者佛夷母也佛母摩一肥也小

夷母告栗摩取姊妹三人執杖釋種女真淨

→ 図版② 原寸図版

写経

②

『六朝写経断簡』

4〜5世紀頃

りくちようしやきようだんかん

図版③ 文字の大きさ比較



北魏前期の北涼時代(397〜439)の写経に属する全二紙・51行の断簡の一部を示した。後半の中央に「比丘尼品第四」とあり、こ

こから数行を選択した。その中の8字を大きく部分拡大した。前回と同系の楷書成立前の用筆をしめす書体であるが、今回は起筆がやや太く、筆勢も重厚である。更に書き方が大変に伸びやかで、前回の緊張感のある書風とは大いに趣を異にする。特に図版に示した「比丘尼品第四」の題名から10数行は、筆者の気分が高揚したのであるうか、大変に伸びやかである。やや小さめの文字と大きな文字を数文字抜き出し、比較してみた。「聖、摩、夷、釈」の大きめの文字は、小さい文字と比較して文字の幅は同じであるが、縦に2倍ほどに大きく書かれている。それに伴い各行の末字は、まるで無理に書き加えたように小さく書き加えられている。文字の構成も大胆で、偏と旁の組み合わせもまるで気の趣くままだに書かれたような文字もある。敦煌の写経や日本の天平写経も大部分が大変に謹厳な趣を示している。この北涼の書風の伸びやかさは、大変珍しいのではなからうか。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りただければ幸いです。

伊藤滋 メールアドレス・mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

# 書道芸術院

## 平成の群像 (2015)



### 塚越紅苑

#### 真筆の尊さ

高校の書道部に入部し、山本聿水先生との出会いで今日があります。

山本先生は、唐の時代の書が好きで特に人間性に立脚した自由奔放な、感情のほとばしる書風の顔真卿の書を好みました。中国で真筆を観、拓本も求めていらして、更に熱の入った指導をされました。濃墨で身

体全体で書く魔法の様な筆さばきは、目から鱗でした。墨象(前衛書)においても、文字性を追求し、古典の勉強に力を入れ、熱心に指導していただきました。

先生が亡くなられた次の年、平成10年に、毎日書道展のグランプリを受賞し、毎日新聞社の小池社長の前で受賞者を代表して謝辞を述べた事は、自分のキャンパスに鮮やかに描かれました。山本先生のお陰です。墓前に報告し、感謝の気持を伝えてまいりました。



これから述べる2つの作品は、私にとって心の宝物です。

一つめは、野口英世記念館でみた母親しかさんが、英世に宛てた手紙です。手紙は元来文意を主とし、用を足す事が主ですが、このように純粹な心理になり、気魄にみちた字には、引きつけられてしまいました。決してうまいとは言えません。母親の生命力を文字に書きながら表しているのですから、字形は一定していなくても、母の愛情が汲み取れ、心打たれました。

二つめは、体操の教師であった星野富広さんの文字です。模範演技で、頸椎を損傷し、首から下が麻痺し、10年間寝たきり状態が続き、初めて口に筆を銜えて書いた「あいいうえお」は、細い鋭い線が小刻みに震え、洗練された技巧の勝ったものより身震いを覚えました。富広さんは、青年期にロッククライミングに熱中し、谷川岳や穂高岳の難ルートに挑み、傾斜90度の崖を登ったそうです。底のように頭の位置よりもせり出している岩場です。一歩間違えたら谷底に落下というまさに死と隣り合わせの危険な岩場をあえて挑戦しようです。並々ならぬ集中力と忍耐力が現在の制作活動に生かされているのだと思います。野に咲く花々に魅了され、次々と作品が生みだされていますが、何故か初めて書かれた字は、心に深く刻まれ、脳裏に焼きついています。墨象は「現状維持は退化だ」と言われています。拡く墨象の世界を追求し書の美の要素となる瞬発力と持続力を支柱とし、粘りあるつよさを発揮し、心に響く書を目ざし、筆を握り続けたいと思います。

# 書のひろば

理事長 辻元大雲

## 第67回毎日書道展各地で

### 北陸展・東海展・東北仙台展盛會に

今回実行委員長として地方展担当地域が普段より多くなった関係でこれまでの開催地域の報告をさせて頂く。

8月23日、北陸富山展を訪問。本院津田海仙理事が実行委員長を務められ、本院関係者がスタッフとして運営に協力されている。富山・福井・石川3県がエリアで中心は富山県出品者が占める。前衛書・近代詩文書・漢字・刻字などほぼ全部門を擁する。役員協力によるネパール震災支援のチャリティ色紙販売は好評で、本部からの担当理事鬼頭墨峻、柳碧蘚両氏のほか私も飛び入り参加させて頂いた。

8月24日、東海展開催前日愛知県美術館ギャラリーへ富山から移動。愛知・岐阜・三重3県がエリア。毎日地方展の魁である東海展は25日午前開幕式とテークカットでオープン。担当理事として会場にて作品解説を地元の安藤豊郵先生と共にを行った。漢字・かな・近代詩文書・刻字などの有力作家がひしめく東海展は高い天井まで埋め尽くす作品群に圧倒される盛況であった。若いスタッフが元氣よく展示や運営に当

たっているのが印象的であった。

9月20日、東北仙台展へ。秋のシルバウィークにかかり大変な賑わいがあった。宮城・岩手・青森3県がエリア。人気沸騰中の若い歌手グループのコンサートが仙台のスタジアムで連休中開催されるということで、市内はもとより付近のホテルはいずれも満杯状態。23日の会期末まで仙台市内は大混雑であった。展覧会場の仙台メディアテークも大賑わいであった。21日午前会場内にて作品解説及び席上揮毫を担当、尾形澄神さんが用意してくれた伊達政宗の短歌と夏の全国高等学校野球選手権大会(甲子園) 準優勝校の仙台育英高校校歌を揮毫させて頂いた。午



東北仙台展席上揮毫

後からは会場を移して祝賀懇親会が40名余の参加で賑わった。本年仙台展30周年記念を迎え、特別講演会が田宮文平先生を講師にお招きして「東北と毎日書道展」と題して開催されたことも特筆される。

9月末には東北山形展にもお邪魔することになっている。毎日書道展の各地方展ではそれぞれの会場にて連日作品解説や席上揮毫などが開催されており、その影響力は計り知れないものがある。

## 全日本書道連盟第159回理事会

9月17日、上野精養軒にて定例理事会が開催された。6月の役員改選による新体制での理事会となり星弘道新理事長のもと進行説明役を事務局長として担当させて頂いた。

①書写・書道教育推進協議会への協力  
推進基金へ本院からも拠出しているが現在830万余円で今後更に協力を呼びかける。

②日本書道ユネスコ登録推進協議会への協力  
2020年秋の登録を目指して運動を展開する。全日本書道連盟・全国書術振興会・日本書芸院が構成団体で、毎日新聞社・朝日新聞社・読売新聞社・産経新聞社・共同通信社など主要メディアが後援している。

③各種報告  
内閣府立ち入り調査、理事會業務構成、会員増への対応など

④中国書法家協会代表団訪日  
11月2日～6日の間、東京を中心に

訪日される。団長は張海中国書法家協会主席、潘文海同副秘書長ら6名で、11月5日(木)午後2時半より国立新美術館3階講堂にて日中書法交流、意見交換会などが全書連主催にて開催される予定である。会員以外でも参加できるので多数の参加をお願いしたい。

⑤平成27年度助け合い募金の実施  
⑥高野山開創1200年記念献書事業の中間報告  
招待作家215点、推薦作家600点、計875点の協力が寄せられている。今後作品図録の作成、作品展示会の開催などが予定されている。

⑦全日本書道連盟は会員会費により運営されており、近年会員数の減少が運営上大きく影響している。表記書写書道教育の推進やユネスコ文化遺産登録などの運動を進めるためにも、財政基盤を安定させる必要がある。6月総会にて理事・参与・評議員の会費を値上げしたが、やはり会員数の増加が最も望まれるところである。本院では院展審査委員会以上の方は無条件で正会員への推薦を行っている。審候以下の方は準会員として入会できる。是非ご入会をお願いしたい。必要手続きについては本院事務局までご連絡いただきたい。

\*連盟正会員 年会費1200円  
(毎日展会員以上、団体からの推薦者)  
\*準会員 年会費600円  
(書を愛好する方はどなたでも入会できる。)

# 漢字 (一)

竹本龍汀

30代から40代前半にかけて、超長鋒、超濃墨に凝った時期がある。自在に筆を動かす訓練になった。超長鋒は筆が開きにくい。鋒先が紙に付いた瞬間の感覚をつかむことによって、鋒先の利いた側筆、筆の開閉のコツを学んだ。たっぷり墨を含んだ線、窮極まで掠らせた線、猛スピード、超スローの線等々、超長鋒の可能性を試してみた。自分の技量に合わない難しい条件での筆や墨によって、意外性のある独自の新しい魅力的な線や用筆が生まれた。難しいものを使いこなすことを通して集中力が増し、線のイメージがより確かなものになって行った。超長鋒や超濃

墨のマイブームは、主に現代書家の書風や線に感動し触発されて起った。これからも時代の流れに敏感に、新しい感動を原動力に、新たなマイブームを起こし、現代に挑戦しながら、日々新たな創作活動을 続けて行きたい。

本作品は長男・長女の初節句を記念して、それぞれの胎毛筆で書いた超濃墨作品です。右は桃の咲く春景をイメージしながら、粘りと捻り込みの運筆に娘への祝いの気持ちに乗せた。左の作品は鯉のひげのような細い筆にたっぷり

と濃墨を含ませ、超スローに書いた。長男への高ぶる父親の悦びを象形文字の絵画部分によって表現した。



竹本龍汀書

## 21世紀の書

### — 私の主張 —

# かな (一)

小島孝子

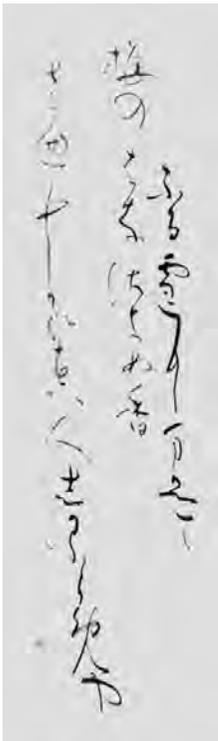
「大きな出会い」の中で

我が恩師高橋松延先生との出会いは、小学校3年生の時。先生宅と私の家はわずか300メートル、そして先生の弟様達と私の父は幼なじみということもあり、先生はご逝去されるまでの40年間、私を我が子のように厳しくも熱心に導いて下さった。先生は永井幸子先生に師事されていたが、その出会いは松延先生が大和運輸(現ヤマト運輸)に勤務されていたおりに、創始者小倉康臣氏から紹介を受けたのが永井先生であった。この大きな出会いがなければ、「かな書の世界」へ私が導かれることはなかったのだ。両先生のご縁を頂

いて今の私があることを、改めて感謝せずにはいられない。

また、松延先生は「継続は力なり」と、常々叱咤激励して下さいました。そしてその言葉に込められた師の深い願いと祈りを、今になって日々感じている。

さてこの作品は今年の書道芸術院展の出品作である。師がご逝去されて満5年、試行錯誤の毎日。皆、師との別れを経て一人立ちしていくが、師の書風を忠実に受け継ぐ生き方と、受け継ぎつつ独自の書風を確立していく生き方と二通りあるという。我が師も後者であったように、私もその道を選んだが、この作品を師は天国からどうご覧下さるか、暗中模索の日々は果てしなく続く。



第68回書道芸術院展出品作「ふる雪に」

小島孝子書



安藤麗華  
（千葉）



「敬業楽羣」

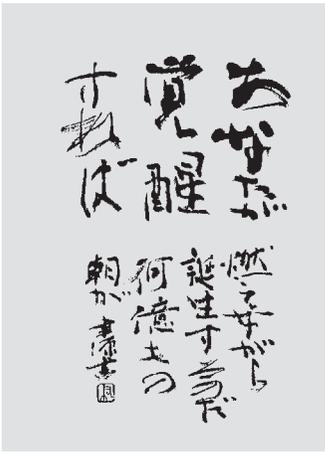
書との出会いは、加瀬澄春先生が、ボランティアとして入居老人に、書の指導にみえた事でした。楽しそうに筆を持つ姿に魅せられて、いつのまにか、先生の塾に通うようになっていました。

「敬業楽羣」は、学業を修め、友人との交友を大切に楽しむとの意です。私の一部として、書と共に、楽しく過ごしていかれたらと願っています。

（麗華）



小野寺隼源  
（千葉）



和合亮一詩「詩の邂逅」より

この度、審査会員にご推挙いただきありがとうございます。これも高校よりご指導頂いている飯高和子先生はじめ諸先生方や書を学ぶ仲間のおかげと感謝感謝です。今後も精進して参りますのでよろしくお願いたします。

作品は故郷の震災からの復興を願う題材を選びました。

（隼源）

# 書家・松井如流

—ゆるぎない信念とともに

2015年10月3日(土) — 12月23日(水・祝)

観覧時間 午前9時〜午後6時 / 入場無料

※11月17日(火)から一部展示替え

休室日 月曜日(ただし10月12日、11月23日は開室)

および10月13日(火)、11月24日(火)

会場・主催 練馬区立石神井公園ふるさと文化館分室

(指定管理者：公益財団法人練馬区文化振興協会)

〒177-0045 東京都練馬区石神井台1-33-44

石神井松の風文化公園管理棟内

「散」 1966年



秋田県立近代美術館蔵 (11月17日(火)から展示)



TEL 03-53372-2572  
FAX 050-3352-2983

# 第51回 書道芸術院単位認定講習会（宮城）

会場 仙台 秋保温泉 岩沼屋

会期 平成27年8月22日（土）23日（日）

主催 東北総局 代表 後藤 大峰

第51回書道芸術院単位認定講習会は東北総局主管にて仙台の「秋保温泉ホテル岩沼屋」を会場に開催されました。開会式では、辻元大雲理事長から、本会があらゆる書道分野を網羅している

ことを踏まえて、会員には各自の専門分野のみでなく、あらゆる分野を理解し、書の見識を高めて欲しいとの言葉を頂き、講習に入った。

## 【刻字】

講師 清水 翠径先生  
 助講師 小林 古径先生  
 助講師 丸山 筑峰先生

今回は「干支を彫る」ということで受講者各自、事前に準備をして来た書稿をもとに講習がスタートした。今回は「セラミックボード」に、「彫り」のみで「彩色」は無く、受講者は物足りなさも感じた様であったが、出来上がった作品に満悦の表情であった。

## 開講式



刻字に挑む受講生



刻字の講義

雨が止み無事、撮影完了。撮影者も受講生であった事を特記しておきます。撮影後、館内に戻り昼食をとった。

## 【書写】

講師 牧 泰濤先生  
 助講師 児玉 頼光先生

単位認定講習会、4回目となる「書写」の講習、「義務教育における書写学習の今とこれから」と題し講師の準備した課題を講義と共に「毛筆」、「硬筆」に、受講者一同、精励した。



書写の講義

1時限終了後、記念集合写真の撮影。朝からの雨天が奇跡的に撮影時間のみ



書写の実技

【漢字】

講師 稲垣 小燕先生  
助講師 阿潟浜翠燕先生

3時限目は「少字数における表現―手島右卿先生の書をもとにして」と題し、手島右卿先生の作品「崩壊」を取り上げ、先生の書の精神性等を解説した後、講師の迫力ある模範揮毫。その迫力に受講者一同、圧倒された。その後、各自、講師に、なり切り、揮毫した。

【現代詩文書】

講師 小竹 石雲先生  
助講師 大平 邑峰先生

前衛書の講習をもって講習会第1日目の日程を終了。一息つく間もなく『懇親会』のスタートである。食事と共に講師陣の好意で提供された玉作の

「現代詩文書の作品を作ろう」と題した4時限目の講習。辻元大雲理事長著「感動を与える漢字かな交じり書」の中の「感動を呼ぶ書は作者と鑑賞者のコミュニケーションによって生まれる」という一節を講義の題材に取り上げ分かりやすく解説をした後、講師、助講師、講習会場を二手に分かれ模範揮毫。受講生、その奥深さに感じ入りながら、それぞれに揮毫に入った。

【前衛書】

講師 田守 光昭先生  
助講師 平岡千香子先生

「書は線の芸術、文字であろうが非文字であろうが、見方は同じ」の持論でスタートした前衛書の講習、「前衛書の楽しさは発想から」とも、極めて多彩で作品創作に制約も無く自由で有ることを認識した受講者は目から「ウロコ」各自、筆、それ以外の用具にて、それぞれの前衛書を創作した。



漢字の実技



漢字の講義

抽選そして運営委員長との「王様ジャンケン」その際の「あとだし」行為に



現代詩文書の実技



現代詩文書 講師の模範揮毫

多いに盛り上がりを見せ、第1日目を終了した。



前衛書  
模範揮毫

めに「関戸本古今集」について其の特徴を解説、それに基いて、かな加工紙半切4分の1タテに受講生毎のそれぞれの感覚で揮毫。熱心な受講生は落款印の位置にまで質問が及び、講師、助講師その熱心さに感心の様子であった。

【院史】

講師 辻元 大雲先生  
助講師 前田 龍雲先生

前衛書完成!!



4時限目は辻元大雲理事長による「書道芸術院史」。講習前半は院の創立の経緯や書道芸術院が常に新しい分野の開拓を担ってきたことなど、時系列を基本に逸話を交えながら、これからは分野階層を問わず指導者を育成しなければならぬと強調。後半は院役員の作品解説となった。初めて参加した若年層の受講生、院の特色をこの講義で理解した様である。

講師 大辻多希子先生  
助講師 木村 東舟先生

【かな】

「かな」で第2日目のスタート、始



かなの講義



かなの実技



書道芸術院史解説1



書道芸術院史解説2

【原拓書道史】

講師 種谷 萬城先生  
助講師 三浦 鄭街先生

今回の単位認定講習会の最後の講習は種谷萬城先生による「原拓書道史」まず、プロジェクトを使用しての山東省の天柱山、雲峰山、太基山などの現在の状況を講師の溢れ出る見識と共に解説、受講生一同感服の様子で、聞きいていた。後半は原拓を間近で鑑賞、カメラ撮影も大丈夫とのことで受講生にとっては、滅多にない機会に興奮を隠せない様子であった。



原拓書道史解説



原拓を間近で鑑賞

講習終了後、閉講式が行われ、後藤大峰東北総局長から次回の開催地、九州支局の牧泰濤支局長へバトンタッチが行われ、単位認定講習会を終了した。ハードな日程にもかかわらず大勢参加された受講生、お忙しい中、来仙頂いた本部役員、講師、助講師の先生方、様々な運営に携わって頂いた、東北総局の運営委員、委員の方々に感謝して終章と致します。  
(記録写真 大槻秀碧 佐久間玉流)  
(文責 後藤 大峰)



認定証授与



閉講式



来年の九州支局へバトンタッチ



受講生代表謝辞

祭姪文稿 (顏真卿) ①

特別研究部臨書課題

Ⅱ (毎日展公募サイズ以内・縦横自由)

当該古典の左記掲載部分以外も可。

漢字研究部臨書課題

Ⅱ (半紙普通判・縦使用) 左記の法帖より何文字臨書してもよい。

〔解説〕 祭姪文稿は祭伯文稿および争坐位文稿とともに、「顔真卿の三稿」と呼ばれている。三稿の中で唯一の真跡で、他は刻帖である。

乾元元年(758)、安祿山の乱で惨殺された顔季明(顔真卿の従兄顔泉卿の末子)の霊を祭るため、顔真卿が書いた甲い文の草稿である。重厚で力強く、感情の趣くままに書かれた卒意の書で、非業の

死をとげた季明への悲憤の情が筆端にほとばしり出ている。古来の草稿の中で最も傑出しているのは、この祭姪文稿と王羲之の蘭亭序と評せられている。

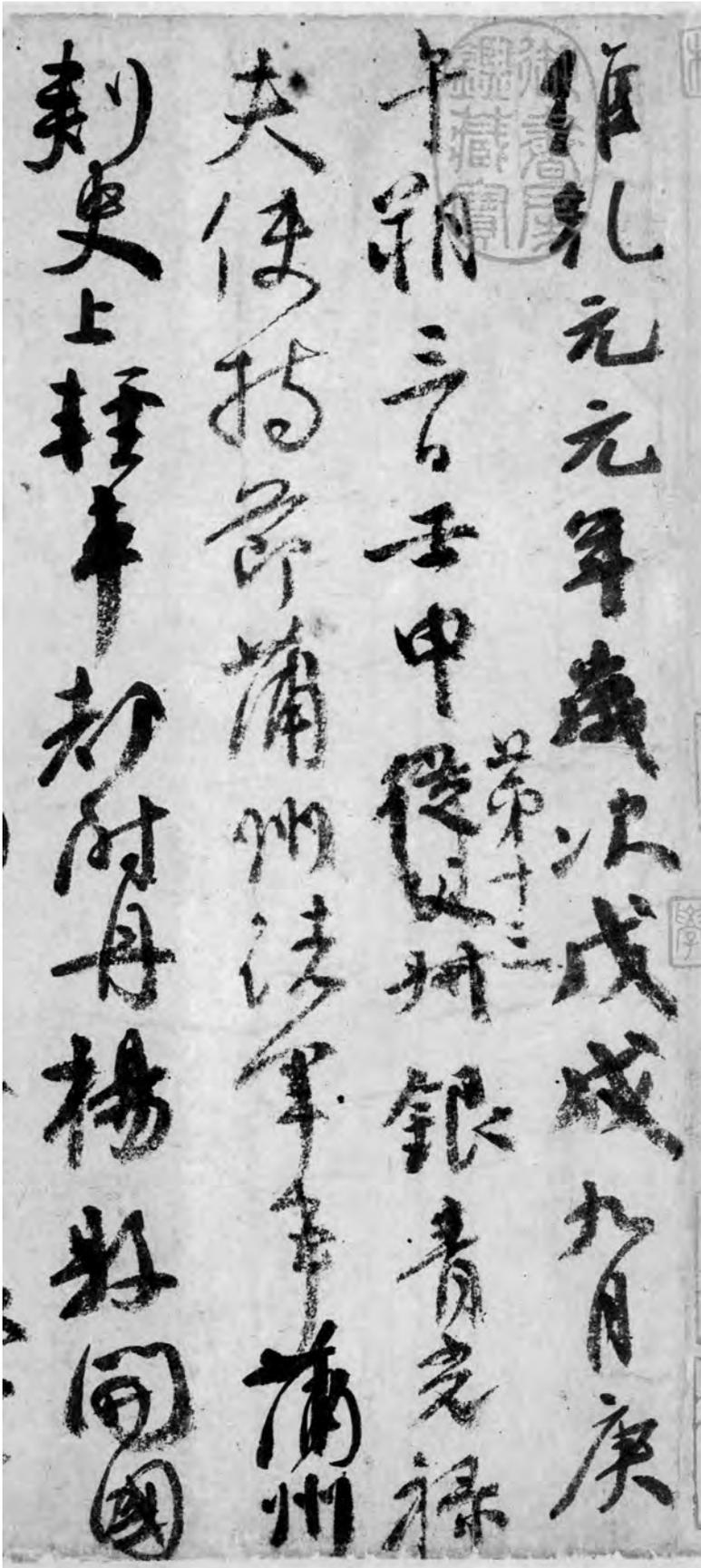
現在は台北故宫博物院に所蔵されている。全長約600cmの卷子装で、うち本幅は28.8×77.0cm。書き入れ1行をふくみ24行、全文294文字からなる。(編集部)

※落款を必ず入れる

署名、もしくは

〇〇臨

(押印のみも可)



(80%縮小)

維乾元元年歲次戊戌。九月庚午朔三日壬申。第三叔銀青光祿大/夫使持節蒲州諸軍事蒲州/刺史上輕車都尉丹楊縣開國

古筆鑑賞

139

小島切 こじまぎれ  
(伝小野道風)

①

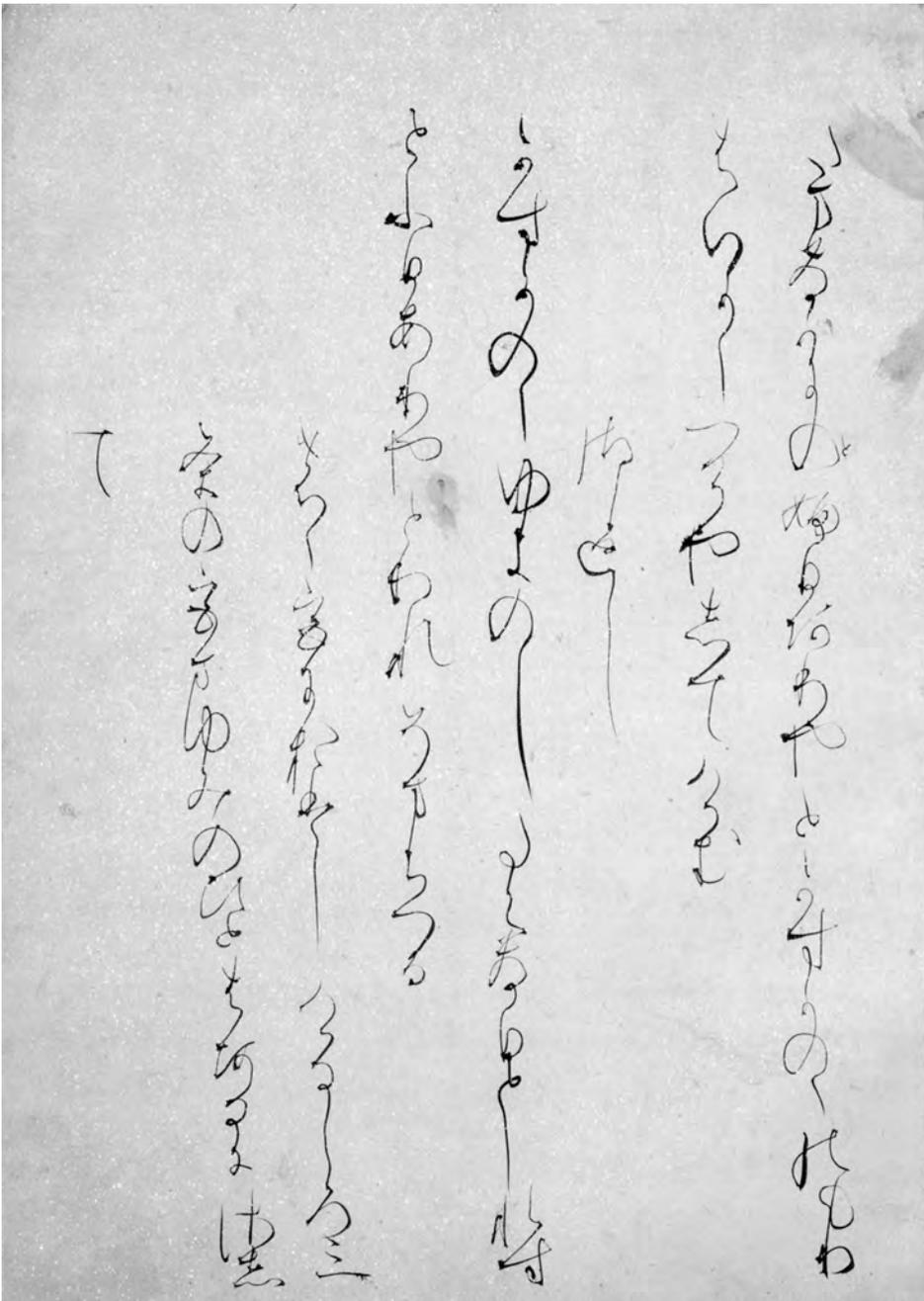
※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

かな研究部臨書課題

|| (半紙普通判(料紙可)・縦長に使用)  
|| 別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。  
左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

特別研究部臨書課題

|| (毎日展公募サイズ以内・縦横自由) 左記の掲載以外も可。



〈よみ〉  
多<sup>万</sup>散<sup>可</sup>爾<sup>と</sup>編<sup>阿</sup>判<sup>利</sup>  
たまさかにのふ日ありやとかすがののり  
はいかゞつげやしてけむ

御返し

可<sup>可</sup>がのゝゆきのしたくさひとしれず  
とふ日ありやとわれぞまちつる

のゝ宮におはしけるころ、三

条の宮まゆみのひとはあるにさし

て

〔解説〕小島切の歌は「斎宮女御集」を  
写したものである。「斎宮女御集」は醍醐天  
皇の第4皇子重明親王の長女で、村上天皇の  
女御となった徽子女王(925〜985)の家集であ  
る。

小島切の名は、もと本阿弥光悦(1558〜1637)  
の門人で茶人でもあった小島宗真(1580〜1655)  
が所蔵していたことに由来する。

小島切と同筆のものは古筆中確認されてい  
ないが、その書風および料紙から、伝称筆者  
の小野道風の時代より下り、11世紀後半の書  
写と推定される。

その書は、繊細で流麗な筆線で書き進めら  
れ、華麗な連綿美をみせている。(編集部)

(※掲載図版は80%縮小)

(個人蔵)



不言之教

よみ (不言之教え)

書体 自由

### 習い方解説 (一)

大野祥雲

不言之教  
(不言之教え)

(老子)

無為自然の立場で教化する。

「不」1画めの横画は筆先を利かしてやや細め。続く斜画を突き出して立ちどまり、引き返して力強い縦画とする。最後は余白をとって沈着に。

「言」深みのある点から伸びやかな横画へ。3本の横画については長短以外にも多少の変化を。最後の口は息長く静かに結ぶ。

「之」分厚い点から左へ飛び力強い線に。最終画は上部を支えるしっかりとした線で伸びやかに。

「教」筆の開閉を生かしながら息長く運筆。偏と旁の構成(相讓相避)、各所に小さな余白をとるなど多少考えた。白がなくなると文字全体が暗くなる。

漢字規定 秀級以下 【十一月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

名越蒼竹選書

梧 聲  
葉 清

蒼竹

梧葉聲清

よみ (梧葉聲清し)

書体 楷書

## 習い方解説 (一)

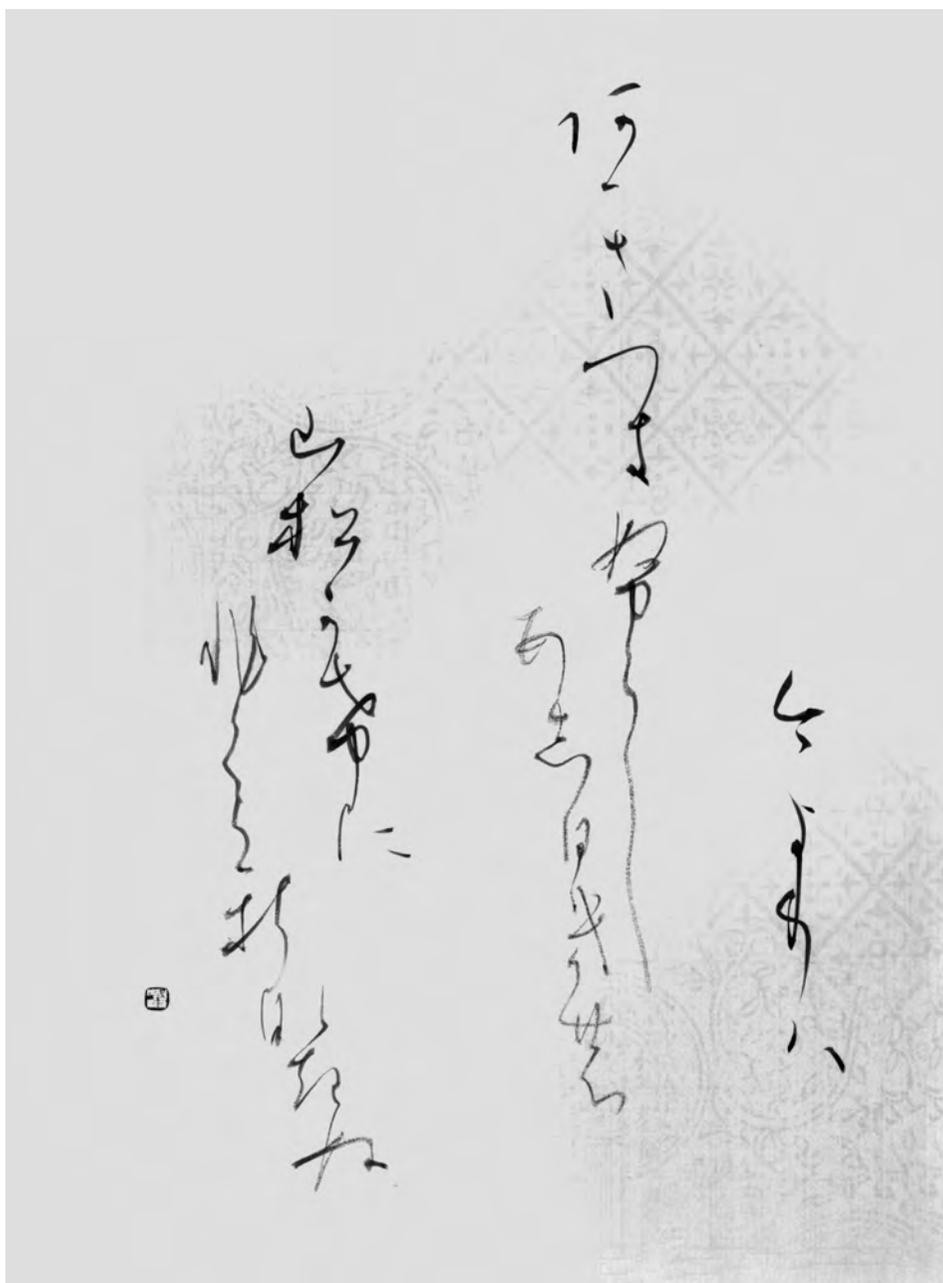
名越蒼竹

梧葉聲清  
(梧葉聲清し)

(舒頤詩)

今月から6ヶ月、秀級以下の部を担当します。楷書で前半4文字、後半5文字を書いて行きます。1回目は褚遂良「雁塔聖教序」の書風を参考にしました。特徴は線が細身ながら弾力性と鋼鉄のような強さをもっているところです。行書のように筆脈が目に見える個所や逆筆の起筆が見られるのも特徴で、穂先を良く利かせて書いてください。

しかし、毎月参考手本のような書風で書かなければならないわけではありません。ご自分の得意な書風で構わないのですが、表現技術の幅を広げることは大切なのでぜひ様々な書風を書き分けられるように挑戦してみてほしいと思います。



## 習い方解説 (一)

平川峰子

今よりは秋づきぬらしあしひきの山松か(可)げ(希)にひ(非)ぐ(久)らし(新)な(那)き(起)ぬ

(万葉集・作者未詳)

かな作品制作の基本は散らし書きだと言われます。

どこに余白を作って散らすかは和歌(俳句)の中の文字とそれを変体がなに置き替えた文字の大小(長さも含む)によって違ってきます。

今回、長く伸ばせる「し」を2行目に入れましたが、3行目の「志」と取り替えて「あしひきき」の位置を高くしても良いでしょう。この和歌には「き」が4つありますので、字典で調べて他の変体がない置き替えてみてください。もし大きな文字を使う場合は、なるべく渴筆にしましょう。

「今よりは」を下方部から書き出してみましたが、上方部に変えた場合は、後半の墨つき「山」の位置を変えてください。

よみ方 今より(利)は(八)あ(阿)きづき(支)ぬ(努)らしあし(志)ひ(日)き(幾)の(農)

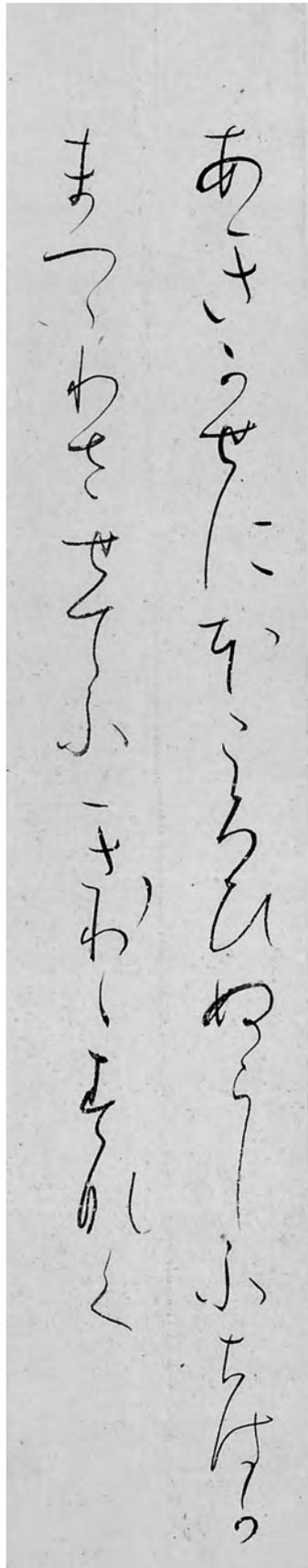
山松か(可)げ(希)にひ(非)ぐ(久)らし(新)な(那)き(起)ぬ

創作

かな規定 秀級以下 【十一月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ12 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野 切第三種  
(掲載写真縮小93%)



よみ方 あきか(可)ぜには(本)ころびぬらしふぢばか(可)

まつどり(利)させてふきり(利)ぐす(眷)な(那)く(久)

### 習い方解説 (一)

天海 矩子

心なき身にもあはれは知られけり  
鳴たつ澤の秋の夕ぐれ

(山家集・西行)

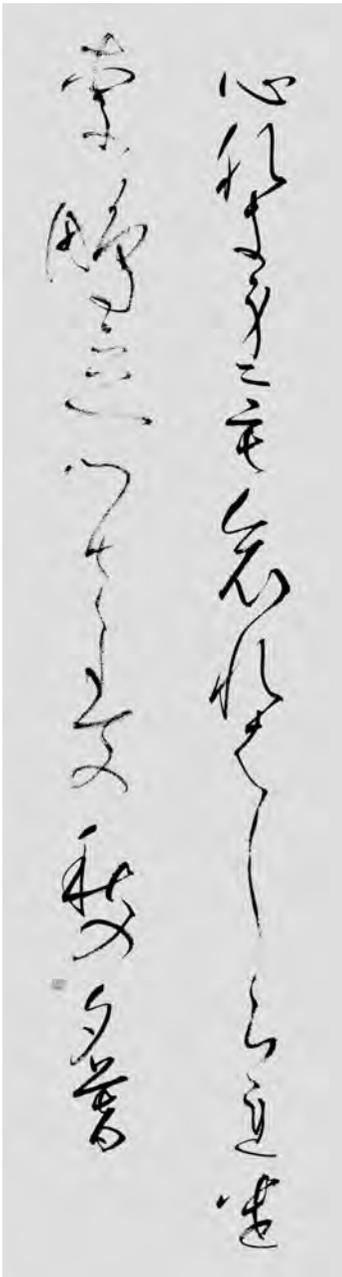
現在の神奈川県大磯町の海岸近くに、名所『鳴立つ庵』がある。西行が旅の途中このあたりで読まれた歌を取り上げました。

全体のバランスを考えて2行目行頭から数文字は墨量少なめにし、変化をつけ字の大きさも1行目と並ばないように仕上げましょう。

\*たて形式に限る

かな条幅規定 【十一月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切(料紙可)

天海 矩子 選書



よみ方 心な(那)き(支)身に(二)も(毛)あは(哀)れは(者)知(し)られ(連)け(遣)り(季)

鳴た(立)つ(川)さは(盤)の秋の夕ぐれ(暮)

創作

漢字条幅規定 初段以上【十一月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

辻元大雲 選書

望海寺前秋雨晴 楊林驛外暮煙輕  
林驛外暮煙輕 入雲書

望海寺前秋雨晴 楊林驛外暮煙輕 (王文治)  
(望海寺前秋雨晴れ、楊林驛外暮煙輕し)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下【十一月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

坂本素雪 選書

獨坐觀心

美 唐 書 監

獨坐觀心 (菜根譚)

(獨坐して心を観る)

書体||自由

### 習い方解説 (一)

辻元大雲

今月から担当します。前半4回は七言二句を、後半は五言絶句を選びました。書体は自由ですので参考に囚われずいろいろ挑戦してみてください。

初回は清朝の王文治の七言絶句を2回に分けて取り上げました。参考例は鍾繇風の楷書です。穏やかな中に骨力を秘めた味わい深い書風を表現してみました。

※たて形式に限る

### 習い方解説 (一)

坂本素雪

—独坐して心気を澄ます—の意。  
「獨」と「觀」は旧字体ですので扁と旁が多画で難しいです。又、「坐」と「心」は極端に画数が少ないので、やや太めにしてその調和を考慮することが大事です。「獨」||タテ画の角度に注意して下さい。「坐」||坐りよく、下部ややどっしりと。「觀」||小さめに書き出す。口は左寄りに。見は少し下げ。 「心」||太めに堂々と。

ペン字規定 【十一月十五日締めきり】

小伏小扇選書

三人行<sup>ぞ</sup>ば必ず我が師有り  
其の善き者を択びて之に  
従<sup>い</sup>其の善からざる者に  
して之を改む  
論語述而第七 小扇書

用紙Ⅱはがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体Ⅱ自由

## 習い方解説 (一)

小伏小扇

紙面全体が視界に入る姿勢で書きましょう。

書きなれたペンで書きましょう。

課題は、論語の述而第七です。

論語は、孔子の言行や弟子たちとのやりとりを記録した書物です。

孔子の教えは、少しも堅苦しいことはなく、現代の私たちにも響くものばかりです。

意味は、

三人が行動すれば、その中には必ず私が学ぶべき師がいる。その中の善い人を選んで、それを見習い、善くない人を見ては、改めるからだ。

※落款を必ず入れる。

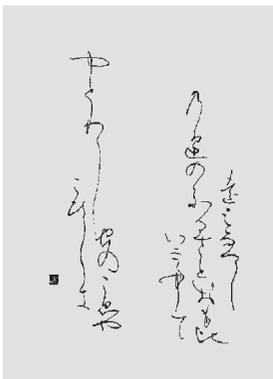
(自分の名前を入れること)

木一作品  
各部総評

NO. 652

かな部 師範 宇田川春華

参考手本を巧く生かしてのオリジナル。前半の塊と後半の爽やかさが、表情を違え見事に展開する。  
◎かな部総評 漢字で始まる時は、墨量をやや控えて出た方が賢明。雅印の位置も作品の善し悪しを決めます。気を抜かぬ事。(洋子評)



漢字条幅部 準師 豊田 翠玉

歯切れよい木簡隸の運筆が生き紙面に動きを与えている。落款もバランスよくまとまっている。  
◎漢字条幅部総評 書風の変化は運筆のリズムや文字造型の微妙な違いから様々に現れてくる。普段の鍛練が物を言う。(大雲評)



現代詩文書部 特選 銭谷 雪蘭

直線を主として線の太細を巧みに織り交ぜた構成で、明るさと緊張感を醸し出した新鮮な作。  
◎現代詩文書部総評 折角言葉を書いている表現するからには文字を大切に扱いたい。(石雲評)



かな条幅部 師範 小野寺久美

抑制のきいた、控えめな表現が効果的で、行間の美しさが際立ちました。更には墨色の研究を、



前衛書部 特選 石森 光琴

対角線に構成された線の力が未来に向けて大きく伸びようとしている感じで希望を抱かせる作品。  
◎前衛書部総評 作品制作への意欲と創意工夫がなされ多彩で心に迫る作品が目立ちました。(美津江評)



◎かな条幅部総評 全般に字の過大、墨量過多が目立ち残念。過剰は品性を欠きます。変体がな盤、津の誤字散見。要確認。(明子評)

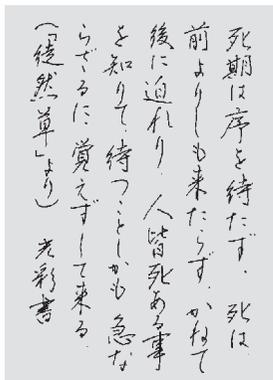
漢字部 師範 井ノ口春峰

柔毫筆を巧みに使い、表情豊かな線が魅力的。特に渴線が明るく爽快。創意溢れる新鮮な行草書。  
◎漢字部総評 上級参考手本風の行草作品が多く見られたが、字形の不正確なものも少なからず。着実な校字が原点です。(萬城評)



ペン字部 師範 飯田 光彰

大らかな運筆と連綿が美しく、字形の確かさと明快な余白、落款まで一貫性があり統一感は見事。  
◎ペン字部総評 全体的に、連綿のきいた行書が多く良い傾向。限られた紙面にどう表現するかが課題、益々の研鑽を。(和楓評)



# 特別研究部優秀作品(特選)

漢字 (もくせい) 西川藤象 「早行(五言律詩)」



174×55cm

西川藤象書

◆縦作品にありがちな古めかしさが無く明るい。濃墨を生かした線の太細が美しく余白も美しい。

(翠風評)

◆一貫した雰囲気を生み出す表現力を支える多様なテクニクに感心させられます。上手すぎます。

(明子評)

◆軽快なリズムで爽やかな表現。鋭い細線をベースに、バランスよく配置した潤筆部が効果を發揮している。

(大雲評)

◆明快な筆致で空間を切り開いて行く。それぞれの工夫された造形が見せ場を出し終始一貫している。

(蒼玄評)

現代詩文書

(大雲)

阿部恵泉

「空汰の詩」



173×45cm

阿部恵泉書

◆縦への流れるリズムが爽やかで、滋味溢れる作。暢達した線が明るいムードを醸し出している。

(大雲評)

◆行の流れと併せて字間の妙を感じます。伸びやかな線に空気の流りが快い。右上りの線がやや目障り。

(明子評)

かな (大雲)

神谷雲卿

「万葉二首」



60×180cm

神谷雲卿書

◆書きすぎの嫌いはあるが丁寧に仕上げている。更には粗密の研究、墨量の研究をお勧めします。

(明子評)

◆練達した線で終始一貫ゆるぎがない。序奏を控え目にし中心部で盛り上がりを見せ歌意を筆に託した。

(翠風評)

◆暢びやかな筆致で大らかに展開した作。広がりある構成でよいがコアになるひきしめた部分もほしい。

(大雲評)

◆一貫した流れで最後までよどみなく流れている。直曲のバランスも良いが少々書き過ぎたか?

(蒼玄評)

◆歯切れ良い独特の線で空間を裂いて見事な作品である。2行目の細身で大小をつけた造形が特に良い。

(蒼玄評)

◆躍動感ある縦作品。章法の勘どころを捉えて巧み。これからどう展開して行くか楽しみだ。

(翠風評)



岩崎陽光書

49×170cm

現代詩文書

(陽陽)

岩崎陽光

「石野マキの詩」

◆横展開作ながら縦への流れを盛り込み、抑制のきいた線が練度の高さを物語る。やや粗さも目立つ。(大雲評)

◆重厚で深みのある線が魅力的だ。行間、字間のとり方が巧み。最終行が幾分異質に感じるのが残念。(翠風評)

◆夢のように美しい風景を力強く表現した立派な作品です。この上は余韻を感じさせる作を。(明子評)

◆練度を感じさせる線が重厚さを出している。後半部が少々書き急いだか、少し残念である。(蒼玄評)

臨書

(蒼原)

金濱珀燁 「枯樹賦」

◆柔らかな筆致で枯樹賦の味わいをうまく表現している。全紙4行構成は平凡だが真面目さを買う。

(大雲評)

◆ゆったりと表現された雰囲気は、現代に生かす努力を感じさせる。筆先に気合いを感じさせる作。

(蒼玄評)

◆楮遂良盛年の作の瑞々しさと独特のリズム感を濃墨で表現した。潤濁を意識して流れを出している。

(翠風評)

◆しなやかな流れ、優しい線質の穏かな作品です。後半にその緊張感が崩れたのが惜しまれます。

(明子評)

前衛書

(白珠)

工藤紀子 「動」



工藤紀子書

91×120cm

◆濃墨による正面から前衛に向き合った作品。重心を下に置き上部はスピード感ある線であとめた。(蒼玄評)

◆上部を大胆に空け、エネルギー感に圧倒される。気迫漲る力作。(大雲評)

◆渦巻く波、天に届かんとする波の生命力を感じた。左上部の墨溜りが光輝いている。(翠風評)

◆企みが情熱を生むのか？情熱が企みとなるのか？その同時性、そして生まれたものは味わい深い。(明子評)



金濱珀燁臨

136×70cm

創作の部(53点)

漢字—6点

かな—5点

現代—22点

篆刻—3点

前衛—17点

臨書の部(29点)

漢字—27点

かな—2点

総出品点数

82点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕

千葉 影山 扇葉

大雲 江本 興舟

〔かな〕

書泉 京 絹子

〔現代詩〕

大雲 松永 香秋

もく 森田 藤谷

仙台 熱海 桃翠

白珠 高村 光霞

〔前衛〕

光昭 林 一宏

松風 西條 松雲

紅瑤 金井みどり

月華 浅野 洋子

〔篆刻〕

大雲 佐藤 希雲

〔臨書の部〕

〔漢字〕

千葉 平野 笛舟

竜泉 小林 洋龍

英峰 吉瀬 彩雨

森地 東平 絹子

千葉 竹浪 叙舟

〔かな〕

書泉 都丸みどり

漢字研究部  
(枯樹賦)

選評 大野 祥雲

今月のホープ作品



日比湖舟

漢字研究部 特選 日比湖舟  
法帖の見方がよい。枯樹賦の特徴をしっかりと掴んで執筆。逆筆という筆遣いもあって、線質は充実。縦長の文字6字を伸びやかに書き、均整のとれたまともな流石です。益々線の抑揚などの変化を磨き、ご活躍下さい。  
◎漢字研究部総評  
課題については編集部解説があります。筆を執る前にじっくり法帖(細いですが)を

見て、解説を繰り返し読んでいただきたい。毎回のことですが、上位の方の作品は優れた学書をされており感心しました。が、いままでは他力本願でいくか、自力で頑張ってみるか、いずれ違が出てきます。さて、今回も楷書の作品、掲載以外の作品がかなりありました。また、低、頓、叢、桃などの文字については、書源で調べてほしかったです。

出字位垂於霜露撼頓於  
風煙東海有白木之廟西河  
有枯柰之社北陸以揚葉為  
關南陵以梅根作治小山則  
巖桂留人扶長松繫馬宜獨  
城臨細柳之上雲霧

霜露撼  
梅根作

南陵以  
梅根作

西河有  
枯柰之

北陸以  
揚葉為

風煙東  
海有白

領秀美京雅友  
子圃和子邦里

之枯柰  
社

豈獨  
臨

北陸以  
揚葉為

東海有  
撼頓於

風煙東  
海有白

風煙東  
海有白

小眞清麻久霞  
知子耀矢美花

河有  
枯柰

霜露  
撼頓

北陸以  
揚葉為

霜露  
撼頓

河有枯  
柰之社

河有枯  
柰之社

修鶴芙智信美  
平豐子恵代子

之枯柰  
社

西河有  
枯柰之

乃山河  
阻絕飄

風煙  
撼頓於

霜露撼  
頓於風

豈獨  
臨

ま政喜翠美紫  
き子枝光紬千

